



題字 小澤信三郎 名誉会長

航 跡

第38号

早稲田ヨットクラブ

2001年 10月発行

発行者：理事長 守屋光雄

編集：事務局長 野口正文

—早稲田ヨットクラブへの提言2001—

<大学スポーツとOB会>

今年のヨット部は勢いがあり、全OBは静かにしているが秋のシーズンに向けて大いに期待している。現役が強くなければOBも世間に大きな顔ができない。

早稲田大学が125周年に向けた募金活動で総長や当局者が直面するのは「野球はどうした？…ラグビーは？…箱根駅伝も…」という各地の箱門会の皆さんからの期待の大きさであるらしい。そして大学はスポーツ強化のためにかねも口も出すようになってきている。特別選抜入学もふえている。

一方、若年人口がどんどん減って、大学経営自体が危機に直面している。運動部は強く強くとレベルを上げる一方、一般学生の体育会離れは全国的である。同好会も減少傾向だという。早稲田ヨットクラブはどうか。ついに会員数が減り始めた。卒業生が少ないので当然の結果です。これは他の大学も同じです。社会の中核をになっている皆さんもこの長い経済低迷で大変苦勞されています。OB会の学生への支援も限界があるという現実には大学スポーツ全体が直面しています。

「舵9月号・90頁」に武村洋一OBが、ヨット衰退傾向に警鐘を乱打しています。「青少年教育にも生涯スポーツにも適したヨットを、もっと盛んにしようよ」「ヨット人口を増やして、しっかりしたシーマンシップを教育しないと、日本のヨットはますます世界からおくれてしまう危機感」です。早稲田ヨットクラブの現状はどうでしょうか。

<ITの生かし方>

インターネットのお陰で、E連絡網に参加している人がふえています。未加入者も多いし使い方もスマートでなかったり、私のように不慣れだったりして実効を上げているとはいえません。しかし各世代間の情報共有化、特にレース結果の伝達は素早くおこなわれています。春のインカレでの青木OB、大塚OBの発信は生き生きしており、胸をおどらせました。しかし受けた方の反応はどうだったのでしょうか。心配しました。

E通信網は徐々に効率を上げつつあり、稲魂(油壺)やスーパーサンパード(夢の島)は有効に使って運行に成果をあげています。理事会のネット発信に各世代、積極的に反応する事を期待します。早慶戦は一方向的に勝ちました。しかしこの情報がネット上に出てこなかったのは残念です。OB会と学生の現場の動きが一体化していない

のでしょうか。

<老若一体化は難しいか>

高齢化が進んで学生さんや若いOBに気楽に話せといっても無理があるかもしれません。自分が若かったときのことを考えても、それはうまくゆくとは思えません。逆に若い世代、少なくとも平成の皆さん、これからのことを考えるなら卒業1年生からほぼ10年生くらいの会を作ってここからの意見を昭和OBにぶつけてくる仕組みはどうでしょうか。

一方社会の重責を卒業し、やっとな時間のゆとりが出来る60歳前後の皆さんの存在は非常に重要です。今までは心ならずも、ヨットにご無沙汰だった人も多いはず。まず海の風に当たってください。そして学生ヨットを、またOBクラブに知恵と力を加えてください。日本の社会と同じで、構造改革が必要なことが多々あります。伝統的なことも続ければよいものでもありません。皆さんの社会での経験がヨットの世界でも役に立ちます。クラブの運営は60歳代がリードすべきです。

<これからの課題>

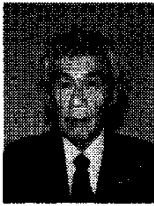
体育実技教育が今年から佐島マリーナ実施となり成功でした。大学体育局も喜んでくれています。社会人教育講座<ヨット>をやったら…という声もあります。また女性学生の比率は約30%です。今や早稲田は日本最大の女子大学ともいえるのです。実技参加学生の40%は女性でした。どう対応するか。具体的に討議が必要。

学連では、やっとな全日本での自艇制を廃止しました。かねのかからない学生ヨットへの第一歩です。少数学生部員に対応する諸制度改革、限らない造艇競争の歯止め、レース運営の効率化、など諸命題があるようです。元来、学生の自然な盛り上がりで出来たはずの学生連盟ですが、「学生は改革の原動力にはなりえない現実」があります。討議の時期です。

<みなさん参加しよう>

このように、問題は沢山あるのです。少数の理事会幹部で出来るはずがありません。各種委員会を作って作業を進めることを提議します。折からインカレが済んだら、クラブとしては人事の季節です。規約の改正も必要かもしれません。各年代が動くよう期待します。

米田晴二(S29卒)

会長挨拶**—早稲田ヨットの発展とOB諸氏の参加を！—**

本年も機関紙「航跡」発行の時期になりました。昨年迄広報担当として米田晴二氏のご指導とご尽力でこの機関紙が継続発行されて参りましたことに私は深く感謝している次第であります。

今回より同氏のご意見もありクラブ事務局長が主体となって少なくとも年一回は本紙を発行する事になりましたが、会員皆様の積極的なご参加を希望いたします。

私の感ずるところでは、従来から地方在住のOB各位には、早稲田ヨットの現状についての情報不足がある様に思います。現事務局長や学生は出来る限り情報の発信を心がけていると思いますが、先輩方からも御遠慮なく問いかけをしてくだ

石井章夫 (S28卒)

さる様にお願いしたいと思います。

すでに御承知と思いますが、今年のヨット部は大変元気です。関東インカレ、東京六大学戦、早慶戦で夫々優勝しました。又石合講師による体育実技は今年より佐島マリナーで実施し大変好評でした。十月には四大学OB戦があり、松本富士也氏をはじめとする実行委員会がホスト校として三十周年記念大会を立派に運営して下さると思います。クラブが管理する「稲魂」の運営も濱田OBのご尽力で順調です。

OB諸氏が積極的に各行事に参加して下さることが、我が早稲田ヨットの発展につながると確信しています。

終わりに「航跡」の発行も出来うれば年間複数回になればと密かな期待を寄せています。

特別寄稿**—誇りある早稲田！ 甦れ早稲田ヨット！—**

小生が早稲田に入学したのは昭和23年です。国民学校の最初の卒業生、旧5年制中学の最後の卒業生、旧制大学(予科・専門部)の最後の入学生、新制大学最初の1年生、それにあわせて旧海軍最後の飛行練習生

で水上特攻隊員のおまけまでついた激動の昭和史の中を走りぬけた学生時代だったと思う。

母方の祖父は商学部の一回生、父は大正13年卒で早稲田のラグビー部とボート部の2部をこなした。また、戦死した義兄は政経学部先輩であった。したがって、小生は早稲田以外の人学は大学でないと思うほど子供の頃から早稲田が好きだった。小生が早稲田を受験した時は現在のような〇×式の出題でなく、作文に始まり試験はすべて記述式であり、2次試験には教授の直接面接もあった。

入学式を終えて最初の授業は時子山先生の政治学であった。冒頭に先生がこの度の入試で教授会が一番重視したのは作文であったと明言された。「権利」という題を出したが権利の裏腹にある最も重要な「義務と責任」を書いていない学生は英語が百点でも、国語が百点であろうがすべて不合格にしたと話された。さらに「義務と責任を全うして初めて権利が主張できる」という本質がわかっていない学生になまじ高等教育を施し社会のリーダーに送り出したら国を滅ぼすことになりかねない。」と付け加えられた。小生身震いして聞き入った事を覚えている。戦中の反動もあ

河村雄三郎 (S28卒)

り、世の中自由だ権利だと浮かっている時に、さすが早稲田だ。筋の通った個性的な入試に早稲田の真髄を肌で感じた感激は決して忘れていない。

そしてヨット部の門を潜り正式に体育局の一員になった。体育局の学生には学校から、OB会から連盟や協会から物的にまた精神的に多くの権利と恩典が与えられる。合宿所をはじめとして諸設備の使用、競技に用いる道具備品の取り扱い、また対抗試合に学校の代表として荣誉ある参加の機会がある。特にヨット部員は帆走を通じ自然の素晴らしさ果てしない驚異を体験し、大自然に対する謙虚性を学びとる恩典に浴す。かつ海のルールを守りつつ技と体力を競い合うレースという戦いの場に身を置き、闘争心を育むことが出来る。

そのうえ、合宿という共同生活の中で学び取る多くの事は、社会に出て必ず役に立つ命題を与えてくれる。ヨット部は海という自然を背景に諸設備と高価な艇を操る恩典に恵まれている。したがって、艇を大切に愛しみ、合宿所を大事に保管する義務は部員一人一人にあります。かつ、母校を代表する部であるからには練習に励み、切磋琢磨して体と技を磨き、レースには勝ち抜き早稲田ヨット部の名声を高めることは若き青春時代の澁刺とした責任といえる。来るべきレースには連勝し、永年にわたり崩れ始めている早稲田スポーツの地位向上に「活」を入れてもらいたいと願って止みません。

関東制覇 いよいよ全日本インカレに向けて 早慶戦完勝・対戦成績タイに(30勝30敗)

1. 春季五大学ヨット定期戦 (4月14日) 森戸海岸

順位	総合	470	スナイプ
1位	早稲田大学	早稲田大学	早稲田大学
2位	日本大学	中央大学	日本大学
3位	中央大学	日本大学	中央大学

(戦評)

今シーズン初めての大学対抗戦であった。南風が8m/s~11m/s吹く中で3レースが行われた。昨年の全日本インカレが終わってからみっちり充実した練習ができていたが、4月の第1週は新人勧誘を全力をあげて行っていたため直前の調整はほとんど出来なかった。しかし、一つのリコールを除いて全艇6位以内の順位でフィニッシュし強風でのスピードと動作に自信を深めることができた。

2. 春季関東学生ヨット選手権大会

(5月4日5日) 森戸海岸

順位	総合	470	スナイプ
1位	早稲田大学	早稲田大学	関東学院大学
2位	日本大学	中央大学	日本大学
3位	中央大学	明治大学	早稲田大学

(戦評)

決勝一日目は北風が9m/s~11m/sというコンディションの中で4レースが行われた。強風下では上位校と下位校の差がはっきりと早稲田は上位を走ることができたが、スナイプでケースとトラブルを一つずつ起こしてしまい初日を終了した時点で総合1位と3点差の2位という結果に終わってしまった。横文字(注)は予選でもやったミスだったので、特にスナイプチームは反省するとともに二日目の巻き返しを皆で強く誓った。迎えた二日目は昨日とはうってかわり北風のフルパワーコンディションとなった。5レース目、スナイプは1位、2位、8位、470は1位、6位、20位、6レース目スナイプは2位、3位、4位、470は1位、5位、6位とスコアをまとめ前日首位にたっていた日大を大きく逆転し総合優勝を決めた。しかし、スナイプはケースとトラブルが響き3位に終わり課題が残る試合となった。スナイプでは山岸(4年)鈴政(2年)が6レース行って13点と他を圧倒し、470では水谷(2年)渋田(3年)が5レース6レースで連続トップをとるなどの活躍をみせた。部員全員で関東制覇の喜びを分かち合い思い出深い一日となった。

(注) リコール、失格などのこと

3. 六大学ヨット定期戦

(5月11日、12日) 初声マリーナ

順位	総合	470	スナイプ
1位	早稲田大学	早稲田大学	早稲田大学
2位	法政大学	法政大学	法政大学
3位	明治大学	明治大学	明治大学

4. 同志社戦

(6月9日、10日) 琵琶湖

順位	総合	470	スナイプ
1位	同志社大学	同志社大学	同志社大学
2位	早稲田大学	早稲田大学	早稲田大学

(戦評)

二日間ともフルパワー以下の軽風コンディションであった。軽風域でのスピードやフレの多い湖でのコース引きなど多くの課題が見つかった。

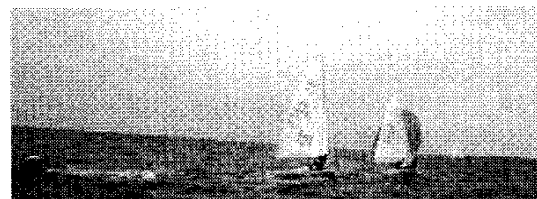
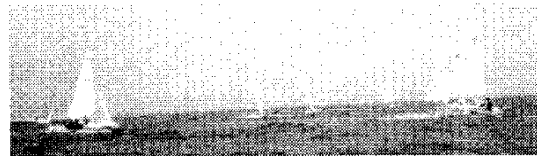
5. 第61回早慶ヨット定期戦

(8月25日、26日) 三戸浜

順位	総合	470	スナイプ
1位	早稲田大学	早稲田大学	早稲田大学
2位	慶応大学	慶応大学	慶応大学

(戦評)

5m/s~7m/sの南風の中4レースが行われた。今大会は、早稲田としては4連勝と対戦成績の五分がかかっており、部員一同闘志溢れる状態で試合に臨んだ。初日、慶応を終始圧倒し2レースを終えた時点で大きく突き放すことができた。2日目も日頃クルーとして活躍する永野間(4年)がスキッパーとして出場しスナイプの1, 2, 3, 4に終わるなど慶応を寄せ付けなかった。輝かしい伝統のある早慶戦に圧勝しかつ対戦成績を五分に戻せたという喜びが部員全員の顔に溢れていた。加えて新人の「自分が上級生になるまで必ず連勝します。」という力強い言葉が印象的であり頼もしく思えた。



6. 三浦ヨットレガッタ

(9月1日、2日) 初声マリーナ

順位	総合	470	スナイプ
1位	早稲田大学	早稲田大学	早稲田大学
2位	慶応大学	慶応大学	慶応大学
3位	明治大学	明治大学	明治大学

本番！！関東・全日本インカレ始る！ 全日本インカレへ向けての抱負



保田望（4年主将）

軽風が予想される琵琶湖においてレースに出場しない部員を含めチーム全員が一丸となり決してあきらめることのない、早稲田らしい粘りの強いレースを展開します。

また、470・スナイプバランスの取れたチーム力を武器に全日本総合優勝を目指します。必ずや轟かせます「都の西北」。



田川健人（4年主務）

4年間の総まとめとしてチームをリードし早稲田大学ヨット部の歴史に新たなページを刻めるように全力を尽します。

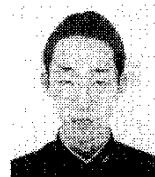
また、関東を負けなしで勝ち進みその勢いをもち21世紀最初の全日本インカレ制覇を果たしたいと考えます。



門林寛行（3年）

今年も全日本インカレまであとわずかとなり練習にも熱が入ってきました。我々3年生としてはヨットの技術だけでなく今年の部訓である「団結」をさらに深めなくてはならない

と考えます。3年生が前面に出て下級生をまとめ上げ1年生を盛り上げます。そして全日本インカレの総合優勝を成し遂げ本年度を締めくくりたいと思います。



山口亮介（1年）

僕達一年生は全日本インカレにおいて一人一人が諸先輩方の築かれた伝統ある早稲田大学ヨット部の一員であることを誇りに思い、チームの勝利につながるべく上級生の方を様

々な面でサポートしていきたいと思ひます。また上級生から様々なことを学び来年以降も一人一人がチームの土台となれるようにがんばってきたいです。

－ 激励・メッセージ －

加藤文生（S33卒）

昭和44年西宮の地にて北島主将率いる当時の強物が全日本を制覇して以来、今日まで勝利の女神から見放される事30有余年。その間、何度となくあと一步で優勝という機会にめぐまれつつも微風でレース不成立、失格などこの30年余りはこんな歴史の繰り返しであった。近年、人間科学部スポーツ学科が誕生し、全国の有能な高校生ヨットマンが集まるようになりその成果も出、今年はずいぶりに部員も増え、小池監督のもと、保田主将が素晴らしいキャプテンシーを発揮し、関西の雄・同志社との定期戦では惜敗したが、関東インカレ春季大会・東京6大学・東京5大学・そして早慶定期戦と連戦連勝し、関東では無敵。

琵琶湖で行われる今年の全日本インカレは、久しぶりに大いに期待できそう。

上期となった470級の田川、S級の山岸・永野間等の努力奮闘があればクラス別優勝はおろか、総合優勝もあながち夢ではありません。

全国の早稲田ヨット部OB諸氏。琵琶湖にぜひ参集し、現役部員に熱いエールを送ろうではありませんか！！

理事長 守屋光雄（S40卒）

ここ数年、何度も期待されながら今 歩及ばずの成績でした。しかし、今年は違う。確かに春か

ら夏にかけての戦績が物語るように、関東インカレ、東京六大学、五大学とバランスのとれた結果内容であった。早慶戦での圧倒的な強さは目をみはるものがあった。これらの結果は偶然的なものではない。日頃の豊富な練習量そして高度な技術向上を目指したものに裏付けられた。「目標意識の高さ」「積極的な行動力」「チームワークの一体感」など他校との比ではなかった。こうした意識・行動は小池監督の強力な指導力によるもので、学生達も彼を精神的な大きな支えとしている。そして保田キャプテンを中心によくまとまった集団である。

さて、これからが本番。この1年間いやここ数年の集大成。過酷な練習、トレーニングの成果が試される関東インカレ・全日本インカレが始まる。これまでのレース経験からくる「自信」と積み重ねた「努力」をいかに発揮すれば、「日本一」の夢・目標が達成されると思う。

学生の諸君に！！ あえて注文をつけよう！！

- ・ 「自信」と「過信」は紙一重。
- ・ 対同志社戦で惜敗した「微風対策」どんな局面にも対応できる技術的・精神的強さの習得。
- ・ 関東では無敵、でも近畿・九州には強敵がいる。事前の情報を的確に把握してほしい。
- ・ ヨット競技にはつきもののルール上のトラブル回避。

2001年度OBヨットレース 楽しくも・エキサイティングな展開

無念！！不参加・加藤氏の逝去

関東10大学OBヨットレース

(6月2日、3日) 諏訪湖
成績：1位明治大学 2位日本大学 3位法政大学
参加者：堀江(16)石井(28)大塚(28)木内(40)

今年は第15回の記念大会。従来1日のレースでしたが(土)(日)2日間にわたって、S級・シーホッパーの2クラスで実施。15回を記念して、70歳以上のスーパーシニアによるレースを行う。10大学とはいえ、16校が加盟登録。今年、早稲田ヨットクラブは参加者が集まらずレース不参加。大変残念な事であった。さらに残念な事に、当大会をはじめから企画運営に尽力されてきた加藤久直氏(23)が5月に亡くなられた事です。参加者全員で加藤氏のご冥福を祈った。来年は多くのOBに参加してもらいたい。

全国のオールドヨットマンが集う大会に 全日本Aクラスディンギー選手権大会

(6月30日、7月1日) 江ノ島
成績：1位 KG OLDSALES (関西学院大学 OB)
2位 RIKKYO DINNGHYCLUB (立教大学 OB)
3位 RIKKYO DINNGHYCLUB (立教大学 OB)
早稲田ヨットクラブは11位

参加者：石井(28)松本(30)千葉(30)舟岡(31)加藤(33)守屋(40)武藤(46)諏訪(43)他応援団多数

今年は東京オリンピックが開催された名門江ノ島ヨットハーバーで開催。回を重ねるごとに参加校(艇)も増え、北は函館から南は鹿児島までの30校38艇が参加。ベタもあれば強風もありオールラウンドの中、2日間10レースを行う。我が早稲田チームは平均年齢60歳を超えるメンバーで臨む。スーパーエース武藤(46)の常に上位入着の健闘も及ばず11位の成績に終わった。来年は西宮での開催。久しぶりに美酒を味わうチャンス到来か？Aクラスディンギーは擬装もセーリングも昔と変わりません。チームメンバーに入りませんか？



惨敗！！来年に早くも雪辱

第1回東京6大学ヨットOB戦

(7月14日) 葉山
成績：1位駿台セーリングクラブ(明治) 2位三田ヨットクラブ(慶応) 3位淡青ヨットクラブ(東京) 早稲田ヨットクラブは6位
参加者：石井(28)米田(29)松本、浜田、千葉、

早稲田ヨットクラブ

遊佐(30)舟岡、日色(31)浅野(39)守屋、木内(40)小坂、岡部(41)岡戸、大原、石合、千津井、金刺、佐々木、原(42)伊藤(44)原田、武藤(46)平戸(48)野口(53)戸枝(56)

現役学生の6大学戦は昭和41年に始まった。がOBの交流は今一步といった感じでした。学生ヨットの活性化とOBによる6大学交流と親善の場作りにと実行委員会が編成され、第1回東京6大学ヨットOB戦が開催された。使用艇はY23。各校の盛り上がりは素晴らしく総勢120名が参加。

当日は晴れ。風の状態もよく、6レース実施。各大学のOBも久しぶりに楽しく、エキサイティングな1日を過ごした。残念ながら、早稲田の成績は最下位でした。これは抽選の艇の良し悪しにあったようです。来年の第2回大会に早くも雪辱に燃えています。勝利には若いOBの参加が絶対条件です。フィナーレに早稲田応援部OBの指導のもと、エール交換そして各大学の校歌を斉唱。



壮快！！S級堂堂優勝

第2回関東Aクラスディンギー選手権大会&第1回Sクラス選手権大会

(8月12日) 初声マリーナ
成績：Aクラス順位 1位立教大学OB 2位明治大学OB 3位関東学院大学OB 早稲田は7位

Sクラス順位 1位早稲田大学OB 2位中央大学OB 3位明治大学OB

参加者：杉山(31)加藤(33)木村(38)守屋(40)滝(41)武藤(46)大原、渡辺(53)小池(56)

昨年はAクラスのみで開催。早稲田が優勝。今年から参加者を増やし、大会を大いに盛り上げるためにスナイブも加わった。参加艇はAクラスが13艇。Sクラスが6艇。

当日の海面は3~4mの風速オールドボーイにとっては最適のコンディション。Sクラスは木村・滝組が30数年ぶりに舵を握ったものの、往年のヒーリングワークを発揮。上位入着。渡辺・小池組は「さすが」といった腕前。他を寄せ付けず。堂々の第1回大会を制覇。Aクラスも武藤が相変わらずの安定したセーリング。今回はあえて他校に上位を譲った。(2連覇は他校のひんしゆくをかうといった事情によって)。

緊急案内

参加者募集中！！

4大学OBヨットレースの案内

恒例の関東、関西の両雄であります、関西学院、早稲田、同志社、慶応の4大学ヨットOB定期戦が、2001年10月13、14日にかけて葉山マリーナ沖にて開催されます。今大会は21世紀初めての、また30周年大会でもあり、若手から超ベテラン層まで広くご参加頂けますようお願い申し上げます。また、本年は早稲田が幹事校であり、インターネット電子メールとホームページを最大限活用して企画運営しています。実施要領、帆走指示書、戦績一覧、交通アクセス、参加者名簿、レース結果等の詳細はURL <http://member.nifty.ne.jp/lirato/4univ2001/>にてご案内しています。勿論、現役ヨット部活動

ホームページへのリンクもありますので是非一度ご参照願います。

【4大学ヨットOB定期戦一口メモ】

第1回大会は昭和46年11月に西宮にてA級ディングーで開催された。台風のため延期(淡輪 H3/9)が過去1回あったが、以来例年開催されている。

今回使用するYAMAHA23は、アメリカンズカップ挑戦チームNIPPON Challengeの練習艇である。第2回蒲郡大会(H5/10)で初登場した。

今回J24世界チャンピオン(同志社OB)も参加し、ハイレベルなレース展開が予想される。

大型艇「稲魂」の活動について

1998年から活動を始めて、今年で3年目を迎えます。「体育実技で一般の学生を、安全に海上で教育することを、第一義としてスタートし部員、OBがクルーザーを中心に交流を深める」ことに努めてきました。今後は、部員、OBのレースの支援や、ヨットに関心のある友人や子供を迎えて稲魂で海に親しく楽しんでもらうサークルを広げてゆきたいと…夢は大きく…今年の活動状況を報告します。

1月22日雪で中止、2月19日船舶検査立ち会い、2月25日運航9人参加、3月上旬上架船底塗装、3月25日運航城ヶ島5人参加、4月8日運航江ノ島7人参加4月21日運航三崎6人、4月29日運航、ABSバーベキュー会10人参加、5月6日運航佐島一部員4人とOB7人参加、5月20日運航佐島8人参加、5月27日新里OB友人と雨で中止、6月24日GPS設置テスト走行10名参加6月29日—30日—7月1日江ノ島でのAクラス全日本支援、並びに上架船底清掃を、回航参加延べ18名、観覧延べ20名、

7月13日—14日—15日葉山で第1回6大学OBレース支援、回航参加延べ16人レース観覧、操船、OB14人、7月21日運航「JASF日本一周イベント・デモ」三崎4人、7月29日久保田OB友人と3人—葉山往復運航、8月

濱田裕 (S30卒)

1日—8月11日体育実技を佐島で行う。回航参加延べ13名。実技生A班37名、B班37名参加。毎日24名—延べ8日で192名乗艇しました。

部員の大型艇担当—永野間、渋谷君のアイデアで、実技生自身の機装、解装、操船を実施、もう1艇のクルーザー「海潮」の支援も得て、模擬レースによるルールの解説が出来実技生の船酔いが少なかった。非常に充実した教習が出来たと思います。支援してくれたOBに感謝、来年も人気実技になると…最終日エンジントラブルがあり、8月の後半は修理のため運航出来ませんでしたがメンテには皆様のご協力が必要。9月始めから稼働始めました。

今後も部員、OBを中心として広く活用を？連絡は定期運航を毎月末に翌月のスケジュールを早稲田ヨットクラブのメーリングに掲載します(WYCMLE@groups.co.jp)会社や友人などお誘いの上参加下さい。9月からは冬時間、10時30分 油壺ボートハウスまでお出掛けください。又油壺ボートサービスのホームページをご覧の上、場所、飲食事店の紹介もあります。

(URL <http://aburatsubo.com>)

定期運航以外で会社やグループで利用したい時、船頭のお手伝いの相談にのります。

東海地区における活動状況

アメリカスカップの挑戦断念により、蒲郡の練習基地が閉鎖になった為か、当地区のヨット熱も少し冷めた様な気がする此の頃です。最近の東海地区OB諸兄の活動としては、470級でシドニーオリンピック候補選手となった田中(H9)、児玉(H10)がいる。あと一步の所であったのが残念だ。今年は愛知県県の国体監督となり、同じ豊田自動織機の鈴木順兄弟(H9,10)と共に出場している。渡

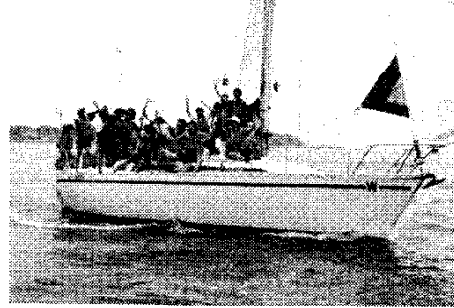
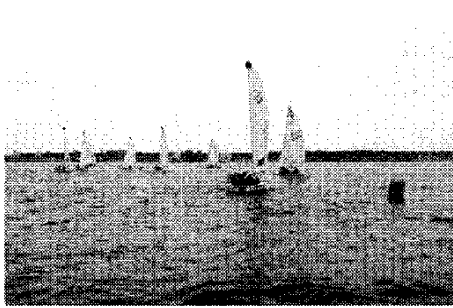
山内憲治 (S44卒)

辺輝(S58)はメルボルン大阪国際外洋レースに参加後、岐阜県の国体監督として後輩の指導にあたっている。3~4年前迄はJ/24全日本選手権で山内(S44)、喜多内(S55)、杉野(H9)が活躍していたがこの頃は一服である。

最後にこの地区の中心的存在であった村瀬治美氏(S28)が病氣療養中のところ、この4月に逝去されました。心よりご冥福をお祈りします。

2001 年度ヨット実技 (佐島) を終えて

実技講師 石合幸彦 (S42 卒)



2001 年度の体育実技ヨット 1 (A・B) の講座は、過去 35 年間続けた千葉県岩井海岸 (下隠居) から湘南海岸、佐島マリーナに場所を移し 8 月 1 日～11 日の間実施致しました。募集状況は大変好評で 2 クラス 80 名定員のところ 174 名の応募が有りました。当然、抽選で参加者を決定しました。

岩井海岸での実技は横浜のヨットハーバー移転にとりもたない、代替地として 1965 年に高村 O B (故人) によって合宿形式としてスタートしました。下隠居の渡辺様の協力もあり 35 年間の永きに渡り早稲田のヨット実技の基地として多く実技生を送り出してきました。ただ、近年岩井海岸も海水浴客の増大により大変危険な状態です。特にヨットの着岸離岸時の状況は何時トラブルが発生しても不思議は無い状況です。安全第一と小島合宿所からの距離 (艇の陸送が不要)、ヨットハーバーとしての設備等々を勧告して佐島マリーナへの変更を決断しました。

実技実施時期につきましては、今年より大学のスケジュールが前期日程の最終が 7 月 31 日と成った関係と佐島マリーナの営業事情 (8 月の旧盆の前)、現役部員のスケジュールで 8 月 1 日～11 日といたしました。(今後も同日程に成らざるを得ません)

御承知の様に大学の体育実技は 6～7 年前より、必修科目から選択科目に成ると言う大きな変化がありました。(文部省通達) 結果、体育実技の授業は半減し、魅力の無い体育実技 (受講学生にとって) は廃講と成る状況です。にも関わらず当ヨット実技につきましては、前任講師の御尽力で 2 クラスの継続を果たしてまいりました。しかしながら、安心できない状況も有ります。一昨年の実技は B コースで 16 名の低調な局面があり、体育局より 1 クラス廃講案が提示されました。大学も予算が大変厳しい状況で学生に不人気で定員に満たない実技は即刻は廃講となります。実技の継続は定員を越える応募が絶対条件です。

今年度の佐島実技は、クルーザー 2 隻 (稲魂号、海潮号 S B 食品所有)、ディンギー 10 隻、レスキュー艇 2 隻 (紺碧号、ゴムボート) を投入しました。参加実技生は常時ディンギーかクルーザー

でセーリング練習が出来る態勢を取りました。着岸離岸の効率化、佐島マリーナホテルの生活環境、平穏な海域 (小田和湾) 等々で実技生の満足度も大幅にアップしたと思います。特に実技生が最初にホテルの部屋に入った時の目の輝きに手応えを感じました。女子学生の参加が 40% 以上に成ったヨット実技は生活環境の整備は重要な要素だと思います。

ヨット実技の運営は現役部員への経済的なバックアップが第一の目的です。そのためには、永続性の有るヨット実技として定着させる必要が有ります。現役部員の少ない現状では、実技の運営は現役 O B の共同プロジェクトとして、より内容の充実した実技に定着させる事が肝要です。何時も人気体育実技として定員割れの無い状況を堅持し、永続性の有るヨット実技として定着させたいと考えています。

今年度の佐島実技は微風状態でしたが、A B 両クラス共天候に恵まれ、セーリング時間を十分とる事が出来ました。2 隻のクルーザー、10 隻のディンギーの投入で常時セーリング練習が出来た点は実技生の満足度アップにつながりました。マリーナとしての諸設備、マリーナホテルの生活環境、現役部員及び O B の充実した指導等々、実技の永続性に手応えを感じました。

ただ、干潮時のクルーザーの出入港に問題が有りました。この点が今後の問題点です。来年度はマリーナ出口近くにクルーザーの停泊ブイの確保を考えています。

今年度の佐島実技には、大勢の O B の協力を頂きました。特に浜田 O B、鈴木 O B には多忙な季節ながらも関わらず 11 日間のフル参加を頂き大変助かりました。心より御礼申し上げます。最後に成りましたが、下記の参画頂いた O D 諸兄に感謝と御礼を申し上げ 2001 年度ヨット実技の報告とさせていただきます。

2001 年度実技参画 O B

佐伯、石井 (S28) 米田 (S29) 安藤、鈴木、浜田、遊佐、千葉、是枝 (S30) 舟岡 (S31) 武村 (S32) 岡戸、中村、金刺 (S42) 杉井、平戸 (S48) 野口 (S53) 坂爪 (S55) 戸枝 (S56)

7 人の侍タヒチで大もて



南海の楽園タヒチで行われた“TAHITI NUI CUP 2001”国際ヨットレースに早稲田ヨットクラブ 30 年卒同期 7 人が参加した。年金生活に入り林往期(秋)にある我々には、遊行期(冬)に入る前に一度は行って見たかった。やってみたかったポリネシア海域でのクルージングが実現する。7 人の同士が決まるまで長い時間は必要としなかった。何故かって? 「お前が行くなら俺も行く」これが同期というものだ。5 月 29 日 11 時成田からの直行便でタヒチへ向かう。思えばこの半年、薬は? 食料は? 着替えは? GPS は? などなど数十品目の携帯品リストを前に酒を飲みながらがやがやと素直でない爺様たちが相談している姿想像できます? 昨日までのそんな出来事に思わずニヤニヤしてたらスパーマンが “MAY I HELP YOU?”

タヒチ本島パペーテ到着は同日午前 2 時。到着口を出るといきなり”出たア”お化けじゃない、タヒチン美女団、レを幾重にも首に巻かれフレンチキスの雨、参ったなーもー。アーチェックインして部屋に入る。ベツは 1 ケ、ダブルベットに同期と同衾。ツイテネ。チューバ? コントラ? スカ? フォルティシモ! タヒチ美人はいざこ?



5 月 30 日・31 日タヒチ島、モレア島と島内観光
6 月 1 日タヒチ島よりライアテア島へ空路移動。到着口を出ると又、又タヒチン美女のお出迎え、髪の花油が頬に沁み込んで思わずウツリ! スターグストヨットクラブで OCEANIS400“DE VINCI”号をチャーター。同夜歓迎パーティ。ご馳走と本場ポリネシアアフラクスをたんのうして船中泊。満点の星、“南十字星”を仰ぎながらリンで乾杯! 夜空に向かって”A votre sante” “bravo”ここはフランス領だぜ。

6 月 2 日第 1 レース ライアテア島—ハビネ島 20M Wind E 20-30kt

千葉栄作 (S 30 卒)

日本、フランス、オーストラリア、ニュージーランド、ポリネシア混成チーム 5 ヶ国 19 艇艇長松本、ナビゲーター鈴木、ボースン千葉、グラインダー濱田・遊佐、タイマー・エンターテイナー安藤、クッカー・ショップパー・フィッシュマン・アカウンタント斎藤以上「7 人の侍」いざ出陣! 5 分前! 各艇サークリング開始「1 分前〜」タイマー安藤の声「40 秒前」各艇一斉にスタートインめがけて舵をきる。その時事件が起きた! 「50 秒前」???? 「馬鹿野郎!」艇長の声「40 秒の次は何で 50 秒なんだ〜」「30 秒だろう」…「すみません!」「10 秒、9 秒、8、7、…スタート」ジャストスタート。狭いパス(サンゴ礁の入り口)の中を大型クルーザーが十数艇凌ぎを削り抜いて帆走する。40 Feet とはいえ南洋での独風下では木の葉のようだ。途中エンジン始動、リタイア。振り返って見れば、タイマー氏の緊張度 120%、他の者も披露困難。この先どうなる?



6 月 3 日(日)レディ機走でラグーン内を遊覧、錨泊デッキに仰向けに天を仰ぐ、サンクロスを囲んで南半球の星群がコンチェルトを奏でている。

6 月 4 日(月)第 2 レース ハビネ島—タハア島 22M Wind E10-20kt free 丸太のようなスピンボールで観音開きを試みるが、ボースン氏フォアデッキで七転八倒、力尽きてダウン。夕方ポリネシアダンスパーティでミス・タヒチとツウショット、旨い酒、ようやく心身回復、やはり侍は酒と女が必要だ。

6 月 5 日レディ遊覧クルージング、島影に投錨。ミスターフィッシュマン氏の登場だ。ピンク色の鯛が「ボソゾール」と数匹船上に釣り上がる。今夜のおかずは鯛のムニエルだ。ハビネス・ホル泊、ジャンギヤパンそっくりさんのオーナーが「ボソソール・ムッシュ」と酒、女、踊り付で 1 万円。同島選抜美人ダンス、バンド全員集合、7 人の侍も外国選手たちと入れ混じって興に入る。



6 月 6 日(水)第 3 レース タハア島一周レース距離 25M

Wind 20-25kt ラグーン内の緑の浅海でのコース・ホールドからランニングまで全ての風向のなか、水深計と覗めつこの忙しいレース。ナビゲーター氏声を枯らしてのタッキング指示、グライダ―両氏もボースン氏もタックの連続に、艇長の罵声に耐えながら舌筋が緩んだ古馬のようにゼーゼー励んでいる。

6月7日(木)レディ参加全艇ボラボラ島へ仲良しクルージング 32M Wind 20-25kt 夕方5ツ星クル・メリディアンでパーティー。水上コテージが乱立する超一流ホテルだ。死チアバンドを聞きながらの豪華な料理に舌づつみ。錨泊。

6月8日(金)レディ終日ボラボラ島ラグーン内で遊覧、釣り、水泳、潜り等のんびり過ごす。錨泊。

6月9日(土)第4レース ボラボラ島―ライアテア島 約28M Wind12-18kt いよいよ最終レースだ。気合を入れてスタートラインへ向かう。突然のスクールに遭遇する。すごい雨のなか秒読み開始、5秒、4秒、3秒…トップスタート、本部船のムッシュ氏親指を高く上げて何や

ら叫んでいる「サムライ!サムライ!OKだ!」虹だ!誰かが叫んだ。海の底から抜き出たように太い虹が大きな弧を描いて迫ってくる。バスを抜けて外海にでる。外国艇2、日本艇2つば競り合いのコース・ホールド、艇長がんばれ!16:30ゴール先着艇から「サムライ!サムライ!」の大合唱。苦しい時も辛い時もすこしは在ったけれど誰の口からもそんな言葉は一切聞こえてこなかった。ほんとに楽しい、楽しい日での休日でした。最終パーティで「7人の侍 490歳」特別表彰を受け壇上に上がり黒真珠用の阿古屋貝に刻まれた「SEVEN'S SAMURAI 490YEARS」PRIZEを一人一人に渡されたとき、会場全員から大きな拍手とブラボー、ブラボーの掛け声。畳み2畳ぐらいのW旗を広げて万歳、万歳と外国選手たちと肩を抱き合って叫んでしまった。

6月10日(日)深夜バレー空港に移動

6月11日(月)0時30分離陸
BON VOYAGE!

事務局だより

<早稲田大学ヨット部試合日程>

関東大会(森戸海岸) 予選 10/5~8 決勝 12~14
全日本選手権(琵琶湖) 11/1~4

<新OB就職先>

2001年3月卒業

羽田文明(三井住友海上)、森山由香利(みずほ
フィナンシャルグループ)

2002年3月卒業予定

保田望(日本生命)、田川健人(安田生命)、山岸
納(麒麟ビール)、永野潤二(大学院)

<日本セーリング連盟会長に山崎達光氏就任>

2001年度日本セーリング連盟(JSAF)の役員が決定。
うち早稲田ヨット部OB関係者は以下のとおり。

- 会 長 山崎 達光 (S32卒)
- 副会長 松本 富士也 (S30卒)
- 事務局長 武村 洋一 (S32卒)

日本のヨット界は永年日本ヨット協会と日本外洋帆走協会の2つの組織がリードする組織体制にあった。数年前に一元化され、より強化で充実した組織になった。

<会費納入の案内>

会費については、毎年1月27日に銀行口座から引落しをさせて頂いております。OB会銀行口座へ振込み頂く会員、専用郵便振替用紙により振込み頂く会員は、2002年度(2002.1~2002.12)会費2万円を2002年1月に振込み願います。

早稲田ヨットクラブ会費振込先銀行口座:
第一勧業銀行 日本橋支店 1445739
口座名義: 早稲田ヨットクラブ

<ホームページとメイリングリスト>

早稲田大学ヨット部は、ホームページを開設しています。また、早稲田ヨットクラブ会員を対象に情報交換の場として登録者全員に送信できるメイリングリスト(e-Groupを利用)を開設しています。登録希望者は、星野禎介(H4)まで申込みをお願いします。

E-mail: teisuke_hoshino@solvex.co.jp

<理事会の開催>

理事会に気軽に参加下さい。会員皆様のご意見ご要望をお待ちしております。

日時: 毎月第3木曜日

場所: 赤坂永楽倶楽部(千代田区永田町2-12-4 山王興和ビル7階) 電話 03-3580-0046

(注)出席される際に開催日を永楽倶楽部に確認願います。

<事務局のメールアドレス・電話・ファックス変更>

早稲田ヨットクラブ事務局のメールアドレス、電話番号、ファックス番号が変更されました。住所など変更されたかたは事務局までご連絡願います。

E-mail: masafumi.noguchi@jcom.home.ne.jp
新電話・ファックス番号: 0422-88-2929

<寄付の窓口>

早稲田大学ヨット部へ指定寄付を希望される方は、事務局までお申し出ください。大学の領収書が発行され、税の優遇がえられます。

<ご意見をお寄せ下さい。>

- 石井章夫
〒180-0012 武蔵野市緑町2-1-5 TEL0422-54-3806
守屋光雄
〒154-0001 世田谷区池尻3-28-21 TEL03-5481-6610

追悼

追悼・・・この一年、大切な先輩が次々に世を去られた。諸先輩を偲ぶことは、そのまま早稲田ヨット部の歴史を回顧することになります。ご冥福を祈りつつ、5人の皆さんを偲びたい。

昭和14年卒業の山田直之助さんは琵琶湖畔大津の呉服屋の旦那さんであった。琵琶湖でのレースの際、お世話になった後輩世代も多い。山田さんの学生時代は部員100人を擁して日本の各レースをすべて制覇した時代、クラブとして活躍していたヨット部が体育会に加盟を認められた時代である。卒業した若者が海軍や船会社、南方の事業に出てゆく時代でもあった。山田さんは近年も東京でのヨットの会合に出席されていた。現役の学生たちをみて「かあいもんやのう」と眼を細めておられたのを懐かしく想いだす。



宮本健次郎さん。兄上・浩太郎氏と兄弟部員。学徒出陣。兄弟が戦時下のシンガポールでばったり会い、またそれぞれの戦場に赴く。健次郎氏は昭和23年夏、やっと復員帰国できた。

兄浩太郎氏は終戦直後の不発爆弾処理中、事故死されたため再び会うことはなかった。昭和23年のヨット部は復学してきた人たちが次第に部員が増えていった。海軍帰り、航空隊帰り、もちろん陸軍からも。壊滅したヨット部をどう再建するか、持ち舟全部をアメリカ軍にとられてしまったヨット部をどう再建するか、衣食住の苦労の中でヨット部再建に努力した時代であった。燃焼不足の青春を、大学の催しで発散しまくる宮本さんの姿を思い出す人も多い。昭和24年卒業。



加藤久直さん。日本ヨット協会でクラブ連盟を担当されていた。大学同好会の諸君の指導をされていた。晩年は国際スナイプ連盟の計測委員もされており、海外の友人との交流も増えた。必要と考えたら英語も勉強

し直すとか人生を積極的に生きておられた。ITに手をつけたのもこの年代の中では、多分一番早いほうであったろう。戦時中は甲府の守備隊にいた。政府機能の一部が移転していた地域であった。終戦になり復学後、学連委員長となり関東でのヨ

ットの造艇に尽力した。A級ディンギーの艇番「1号」をとったのが終生ご自慢であった。昨年のシーベン始め、稲魂にも乗りこられたが数ヶ月後体調をくずされた。加藤さんの業績の一つは、十大学OBレースの継続推進に尽力されたこともあげられる。他校のコットマンにも早稲田の名物男として勇名をはせ、一目おかせていた。昭和23年卒業。



村瀬治美さん。昭和28年卒業。名古屋の村瀬3兄弟の末弟。長兄が中学時代からオリンピックを目指していたヨット一途の一家であった。

治美さんは何故か角帽でヨットにのるのが好きだった。スマートな乗り方で、「スナイプのプリンス」と渾名するものもいた。戦後の学生はみんな貧乏だった。後年、「血を売ってヨットに乗っていた」と笑っていた。村瀬さんだけではなかった。卒業後、名古屋でOBの中心となって活躍した。J24の初期から常連でもあった。3年前、蒲郡のニッポンチャレンジのベースキャンプでの催しでは、健康不調ながらみんなと楽しんでおられたのを思い出す。



石田晋也さん。昭和37年卒業。33f早風のメンバーであった。昭和30年代は各大学が大型艇を持ち学生オーシャンレースをおこなっていた。

早風は常に元気だった。37年秋に早風の遭難があり、かわいい後輩たちを一挙に失った。石田さんの悲しみは自分自身の死の日まで続いていた。彼は「やっ、あいつらと一緒にのところにゆける」と想っていたに違いない。仕事場のノートに大きな字で「早風」と書いてあった。彼の片腕だった小島君のご実家の別荘が「小島合宿所」である。彼は卒業後、「舵社」に入社し出版の仕事を学び数年後独立し、出版業を経営した。早稲田ヨットクラブ「航跡」の昨年号まで全部お世話になった。昨年5月「36fげっこう」で仲間と大島・下田をクルージングし、2ヶ月後から体調を狂わせ、あっという間に逝ってしまった。「頑健すぎたな」と仲間たちは惜しむ。

早稲田ヨットクラブ事務局

〒184-0011

東京都小金井市東町3-2-19

電話 & Fax 0422-88-2929

野口 正文